令和7年度　学校関係者評価書

鈴鹿市立河曲小学校

NO.

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）	評価指標・行動指標	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上×ICT活用	1　教職員の授業力向上と校内研修の充実 ・「全国学力・学習状況調査」や「みえスタディ・チェック」の結果を踏まえ、課題を改善するために効果的な授業実践を行う。 ・国語科における聞く力を基盤とした、「一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業づくり」をすべての教科において意識し、児童の主体的に学びを図る。 ・算数科の授業（3～5年）で少人数指導を実施し、学力の定着と個別最適な学びを図る。 ・指導教諭を中心としたと児童の学びに向かう姿勢等の確認、ミニ研修会や打ち合わせ等を活かした、学力保障に向けた日々の取組の進捗状況の確認を行う。 2　基礎学力向上への取組 ・3年生以上の学年で算数の少人数指導を実施し、基礎学力の定着を図る。 ・河曲っ子タイム（朝学習）を1、2年生は毎朝、3年生以上は1回（水）実施する。 　＊国語・算数の基礎基本、学Vivaセット、学習プリントなどの活用と反復練習。 　＊「よむYOMUワークシート」「読む・書くワークシート」を活用した読解力、論理的思考力の育成 ・スペシャルサマー等、機会を捉えて補充学習を行う。 3　読書活動の活性化 ・学校図書館や学級文庫の環境整備を図書巡回指導員と連携して行い、朝の会や給食後など、読書に取り組む時間を設定する。 ・図書委員会を中心とした主体的な取組（読書祭り）や読書ポイントカード、先生のおすすめ本の紹介、読み聞かせ等による読書に向かう児童の意欲向上を図る。 ・こども新聞の活用読書貯金を全学年で行い、貸出冊数の1人あたりの平均を増やす。 4　家庭学習の定着に向けた取組 ・目標をもって意欲的に宿題に取り組めるように、家庭学習強化週間を年3回設ける。 5　ICT活用 ・日常の授業におけるクロームブックの活用を図る。 ・ドリルパーク等を活用した持ち帰りの家庭学習の活用を図る。	1　教職員の授業力向上と校内研修の充実 ・研究授業を行う教員100％ ・学力調査（学期末テスト）・みえスタディチェック：全国平均・県平均以上 ・児童アンケート「授業はわかりやすいですか」85％以上 ・児童アンケート「先生や友達の話をよく聞いていますか」85％以上 2　基礎学力向上 ・3年生以上の算数学期末テスト全国平均以上 ・「よむYOMUワークシート」「読む・書くワークシート」は朝の学習を利用し週1回実施する。 ・学年末の漢字50問テスト全国平均以上 3　読書活動の活性化 ・保護者アンケート「お子さんは進んで読書をしていますか」80％以上 4　家庭学習の定着 ・児童アンケート「宿題をきちんとしていますか」保護者アンケート「お子さんは家庭学習の習慣が身についていますか」：85％以上 5　ICT活用 ・クロームブックの日常的な持ち帰り：毎日（4年生以上） ・クロムブック活用アンケート「授業中にクロムブックをどの程度使っていますか。」：週3回以上、80％以上（4年生以上）80％以上	【1　教職員の授業力向上と校内研修の充実】 〇「わかりやすい授業構築」について保護者の肯定的な回答が94％と高かったが、基礎・基本の定着については学調からも改善が必要である。 ▲授業の分かりやすさについては83％で、授業改善が必要である。 〇話を聞くことについては、児童の91％が肯定的な回答であった。 ▲全国学調は全教科で全国平均を下回っている。4・5年生のみえスタについては、県平均を上回っているので、学調に向けた学校としての取組が必要である。特に基礎・基本の定着ができていない層の底上げ必要であるが、十分な改善が図られていない。 ※学調（国語－5．8、算数ー6．0、理科－7．1） 　5年みえスタ（国語＋1．7、算数＋11．6、理科＋11．3） 　4年みえスタ（国語＋17．0、算数＋13．7） 【2　基礎学力向上への取組】 ▲よむYOMUワークシートや読む・書くワークシートに追われている感がある。児童にとってやりがいのあり自信につながるような手立てが必要である。 【3　読書活動の活性化】 〇図書委員会の取組や巡回指導員等の取組は充実しつつある。 ▲目標値を達成することができなかった（肯定的回答：児童68％、保護者40％）。本好きのこどもたちを増やす取組を進める必要がある。毎年読書については課題となっているので、学校で読書の時間を確保することが必要である。 【4　家庭学習の定着化】 評価指標である学校アンケートより、肯定的回答が児童88％で目標値達成、保護者は75％で未達成であった。このことより「児童は『家庭学習をすればいい』、保護者は『自分から学習に取り組んでほしい』」という意識の差があることが課題である。 【5　クロームブックの活用】 〇クロームブックの日常的な持ち帰り（4年生以上）は達成できた。 ▲授業中にクロームブックをこどもたちが活用できていなことが大きな課題である。	・家庭での学習できる指導が必要である。 ・学力向上はやはり読む力、理解力をつけることが必要である。 ・読書活動の活性化のついては、読み聞かせやボランティアのさらなる継続をしていけるとよい。 ・読書時間の確保、読書目標を各自で設定化し、各学級で達成度を目視化するとよい。 ・新聞を読んで感想を発表するなどの工夫が必要ではないかと思う。 ・学校で分析された学調やみえスタの具体的な課題を各学年で実現に向けて取り組んでいってほしい。 ・ただあまり全国平均正答率を意識しすぎるのではなく、河曲小学校らしさの教育をお願いしたい。 ・今は昔と比べて宿題が少なく、答えもこどもが持っているため、自主性が少なく思える。 ・今も昔も分からない問題などがあっても理解するのではなく、分からないまま学年を上がっていくため学力低下につながる。 ・少人数教室の取組はきめ細やかな学習指導の点で児童にとてもよい取組だと思います。先生のご負担は増えるかもしれませんが、可能な範囲で引き続き継続していただきたいです。 ・読書活動は日々の積み重ねが大事だと思いますので、1回当たりの時間は短くても継続して読書する環境を設定していただきたいと思います。 ・ドリルパーク等のクロムブックを使用する宿題について、学童へ通うこどもは学童内でインターネット環境がなく宿題をすることができないため、ICT活用の重要性は認識しておりますが、出題の方法については検討をしていただきたいです。 ・おすすめ図書を友だちに紹介する「読書ゆうびん」等を年2回程度すると、読んでおもしろかった本を誰かに教えることができ、教えてもらった人も新しい発見がありよい。具体的には、はがきサイズの用紙にイラストなどを描いて、おすすめのポイントなどを具体的に記入する。併せて学級や記名もする。 ・クロームブックの活用方法については検討が必要ではないか。	・よむYOMUワークシートや読む・書くワークシートを活用し、読解力の定着を図る。 取組の際には取組枚数に目がいくのではなく、こどもたちの学習意欲と学力向上につながる取組になるよう工夫を重ねていく。 ・算数の少人数指導は4・5年生や学級人数の多い学年で定数加配があれば可能な限り実施し、レディネステスト等を踏まえた習熟度別学習を実施し、個別最適な学びを通して基礎基本の定着を図る。 ・河曲小学校の弱みを克服できるよう授業改善に図る。 ・図書委員会を中心に、本の貸し出し冊数を増加させる取組を行う。 ・短時間でも毎日読書の時間を確保することが大切なので、読書量を増やすために、朝の会や給食後など、読書に取り組む時間を設定する。 ・PTA予算で学級文庫の充実を図り、計画的に学級文庫を増やしたり、学期ごとで学級間の本を入れ替えたりして読書の推進を図る。 ・「この本よかったよ」などおすすめの本の紹介を実施し、掲示する取組を図書委員を中心に行うことで、一人一人の読書への興味関心を図る。 ・テストが終わった後等の隙間時間にはクロームブックのタイピングではなく、読書活動をするようにしていきたい。 ・宿題は漢字、計算。音読の3点セットがどの学年も中心である。学童でインターネット環境がなくても実施できるように、ノートを使う宿題を継続していきたい。
長期欠席対策	1　不登校をうまない取組の推進 ・校内支援委員会、ケース会議の適宜開催、支援方法の共有を図る。 ・SLS、SC、SSWや関係機関と情報を共有し連携を図る。 ・特別支援教育推進委員会を月1回開催し、状況を共有し、改善策を検討する。 ・校内教育支援センター「ほっとルーム」の活用し、不登校児童の居場所づくりを図る。 ・不登校傾向児童の情報共有を毎日行う。 （ほっとルーム担当、SLS、養護、特別支援Co、不登校Co、担任、管理職） ・児童理解に関する研修会を継続的に開催する。 ・未然防止、早期発見、早期対応等、いじめをなくす取組を徹底する。	・校内特別支援教育推進員会：毎月1回 ・不登校対応の研修会：年3回 ・長期児童欠席（30日以上）：前年度以下 ・児童アンケート「学校のは楽しいですか」保護者アンケート楽しく学校に通っていますか」90％以上 ・児童アンケート「困ったことを先生や友だち、家族の人に相談できますか。」80％以上 ・情報モラルの授業・教員100％	○SLS、SC、SSWを積極的に活用し、不登校児童や困り感のある児童・保護者の支援を行った。「ほっとルーム」通室児童の様子をほっとルーム担当、SLS、養護、Co、担任、管理職で記録し、必要な場合は校内で情報共有や手立ての相談をした。 ○特別支援推進教育委員会（月1回）を実施し、困り感をもつ児童や保護者の情報共有を行った。委員会内では、事例についてのケース会議を行い、支援の方法を話し合った。記録は全職員で共有した。 ○緊急性がある場合やチームで対応が必要な児童について「ケース会議」を開き、必要な情報共有を行い、家庭環境等を考慮しながら対応を話し合った。 ▲不登校対応についての研修会を有意義に活用することが難しかった。校内で不登校傾向が見られる児童の考えられる原因や課題を話し合い、教員間で事例検討をする機会をつくると、次年度以降も児童へ継続した対応が行うことができる。 ▲居場所の約束（ほっとルーム・保健室）を明確にどの児童にも共通して提示した。しかし、児童のおかれている家庭環境や不登校背景などは様々なため、ルールだけで動くのではなく、柔軟な対応をつる必要がある。児童のためにすべき支援を考え、学校として対応可能かを話し合い、模索し続ける必要がある。 ▲保護者アンケートでは93％が楽しく学校へ通っていると回答しているが、児童アンケートでは85％にとどまっている。15％の児童が楽しいと思えるような授業改善や取組が必要である。 ○譲歩モラルの授業は全学級で取り組めたが、放課後のゲームでのオンライン上でのトラブル等は年々増加している。学校では限界を感じている部分もある。	・一人ひとりと向き合い、学校を楽しくさせることを学校と家庭が協力し合っていくとよい。 ・不登校対応の積極的な取組を望みます。 ・保護者との連携は取れているのか？ ・楽しく学校に通ってもらう環境づくりに教職員、保護者、地域は一体となった取組がさらに必要だと思う。 ・不登校は親の甘えのもとに生まれると思う。（無理に行かせないことや登校時の親の不自由など）近年親の登校時の多さや送りが多く集団への入りが苦手になっていくのではないか。 ・小学生の不登校についてはメディアなどでよく聞くことはありますが、身近なところでもあることを今回知りました。今なぜあるのか。 ・居場所の約束など発生に対する処置はよくわかりますが、発生に対する原因がよくつかめません。 ・ほっとルームが毎日開所されており、様々な事情を持ったこどもたちが過ごせる居場所が継続的に設置されているということはとても良いことだと思います。どのくらいの児童が利用し、支援員の数に不足がないのか等、分からない部分が多いですが、必要とすることもたちが安心して過ごせる場所を引き続き提供していただきたいと思います。	・不登校や長期欠席の問題は、解決するまでに長期間になることが多く、生活背景を含めて原因を正確に把握し、学校とのつながりを切らさず、信頼関係を構築していくことが必要である。 ・不登校の支援には、ある程度の関係づくりが必要である。そのため、一定の期間、学校に来て関係づくりをしてもらう必要がある。保護者のニーズに応じて支援会議をしたり、学校とSCやSSW、関係機関が行うケース会議を早めに実施するとともに、担任が一人で抱え込むことのないようにチーム河曲で対応していく。 ・児童へのアセスメントを校内で共通理解をはかれるよう、「こども支援シート」を活用しながら、丁寧に引き継ぎを行っていく。 ・不登校や登校拒否等の対策について、学校側としての意見はその子の状態によって、学校に来させるのか、心を休ませる時間をとるのかということを判断していく必要がある。ただ休ませることだけでなく、担任が電話連絡や家庭訪問をして、積極的につながっていく必要がある。 ・学校側で対応できないところは、病院・SC・こども家庭支援課・けやき教室などにお願いをしているところである。 ・ほっとルームに通っている児童は数人である。1日ほっとルームで過ごす子は限られており、ほとんどは教室へ戻ることができている。ほっとルームへも登校できない不登校の児童に対しては、定期的に電話連絡や家庭訪問をしてつながりが途切れないようにしている。
地域連携	1 保護者、地域への積極的な情報発信 ・学校運営協議会での協議に基づく学校運営の改善・充実を図る。 ・地域と連携した取組（米作り・ラジオ体操・参観・出前授業等）を学校Webページ、学校だより等で定期的に発信する。 2 学校教育活動への地域人材の積極的な活用 ・地域コーディネーターと連携し、円滑な支援を行う ・学校支援ボランティアやゲストティーチャーの活用を図る。 ・地域づくり協議会と連携した学校環境美化活動の実施（年間4回） ・かわの安全パトロール隊活動を継続する。 ・公民館や民生委員、まちづくり協議会と連携し、出前授業を積極的に活用する。 3　中学校区での幼小中連携の推進 ・ノーメディアデイ等の取組を校区で時期を合わせて実施する。 ・非認知能力育成についての取組を校区全体で推進する。	・週に1回学校webページを更新する。 ・保護者アンケート「学校は教育活動やこどもの様子ホームページや学校からに便りなどで伝えていますか」80％以上 ・すべての学年で地域人材や地域を活用した学習を年1回以上実施する。 ・教育指導課アンケート「今住んでいる地域の行事に参加していますか」70％以上 ・保護者アンケート「お子さんは携帯電話やスマートフォン、コンピューターなどのインターネットやゲームについて、家の人と約束したことを守っていますか。	○学校アンケートから、保護者の肯定的回答が93％と、非常に高い数値で目標を達成できた。Webページだけでなく、便りもしっかりと見ていると考えられる。 ▲一方、児童の肯定的回答は40％と低く、HPはあまり見ていないという実態があり、周知していく必要がある。 ○全ての学年で地域人材を活用した学習実施できた。地域のは教材にできる人材や教材が多いので、総合的な学習や生活科の授業を通して、活用してくことが必要である。 ○地域行事へは77パーセントが参加していると回答しており、市平均（78）を同様の結果であった。 ○学校アンケートから、「インターネット、ゲームの約束が守れた」について保護者76％（児童84％）という結果であった。このことから概ね守ることができた。 ▲学習用端末（クロームブック）の使い方が守れなかったり、対象年生に達していないアプリの使用が見られたりした。そのため、1学期生徒指導部から2学期に研修部からクロムブックのきまりを再確認し、2学期には学習用端末の使い方の職員研修を実施した。	・地域と学校はうまくいっている。今後もこの関係を続けていくことが大切である。 ・1年生の昔遊びや体験など、地元公民館との連携は取れているのか？ ・神戸中学校が神戸高校と連携して学習交流を行っているように、小中の連携はできないのか。 ・地域との連携をいうなら、公民館の発表等にもっと学校施設を開放すべきではないのか。 ・パトロール隊活動をもっと積極的に取り組むべきである。 ・健全育成の視点から地域連携は非常に重要です。小学校の除草作業やラジオ体操など地域の一体感が生まれている。地域連携強化をさらにする進める取組をする必要がある。 ・地域行事への児童の参加はどの児童の育成にも影響は大きいと思います。河曲地区の自治会別ではどうなのか、レベルを上げるヒントが見つかるかもしれません。 ・自治会では行事など活発に行われていると思いますが、気になっているのは児童の参加率です。児童もスポーツクラブなど忙しらしく、年々参加する児童が減少しているようで気になっています。このあたりを推進できる人材育成も必要かと感じています。 ・地域と連携した取組を逐次学校ホームページに掲載していただき、こどもたちの様子もよく分かっていつも楽しく拝見しております。ご担当される先生によって更新頻度が極端に変わることのないよう、引き続き学校ホームページへの掲載をしていただきたいと思います。 ・授業の中で学校HPを見る時間を作る。まずは見てみる機会を作るとよい。 ・クロームブックの使い方については今後も定期的に指導が必要だと思う。	・PTAとの連携した学校美化環境整備を継続し、協力活動を充実させる。 ・夏季休業中のラジオ体操とポスターコンクールを来年度も実施していく。 ・状況に応じた学習支援ボランティア活動を推進する。 ・出前授業や地域学習を大切にした授業計画を継続する。特に生活科や総合的な学習では地域教材や地域の方にお世話になることが多い。昔遊びや地域の祭りなど、地域の方から学ぶことは多いので、積極的に活用していけるように年度当初の年間計画の中に位置づけていけるよう働きかけていく。 ・パトロール隊については、学校行事の際には駐車場整理等で支援いただき助かっている。ただ、人員が少なくなってきており活動機会が限られているのが現状である。可能な限り連携して取り組んでいきたい。 ・神戸中学校区で連携できるところはうまく活用していきたいと考えている。夏休みのサマースクールに中学生のボランティアを活用できないかについては働きかけていきたい。 ・地域とともにある学校づくりに向けて、取組については積極的に学校ウェブページに掲載していくとともに、担任から児童が閲覧できるような時間を定期的にとっていきたい。
非認知能力育成	1　非認知能力を意識した教職員の育成と授業実践 ・職員に向けて非認知能力に関する研修を行う。 ・全学年に非認知能力に関するアンケートを行い、実態の把握を行う。 2　目的を明確にした各種行事や出前授業等を実施 ・非認知能力を意識した実施前後のめあてと振り返りを行う。 ・非認知能力を意識した児童への言葉がけを行う。 ・地域人材等を活用した出前授業や体験授業を積極的に行う。 3　学習面・生活面での規律の徹底 ・「聞くこと」を意識した研修取組の徹底を図る。	・全国学力・学習状況調査の質問事項のうち「自己肯定感」に関わる項目：否定的回答10％以下 ・非認知能力にアンケート2回実施 ・児童アンケート「先生はあなたの良いところをほめてくれたりはげましてくれたりしますか。」85％以上 ・児童アンケート「係や当番の仕事を進んできちんとしていますか。」80％以上 ・児童アンケート「先生や友だちの話をしっかりと聞いていますか。」90％以上 ・児童アンケート「筆箱の中身は、きちんとそろっていますか。」85％以上	○非認知能力アンケートを全学年で2回以上実施し、こどもたちの実態を把握するとともに、学校行 事への取組を中心に非認知能力の育成を図った。 ▲非認知能力育成に関わっての児童への言葉がけは、84％と目標値を達成できなかった。自分のことを認めてくれていないと感じている児童が一定数いる。 ▲全国学調による自己肯定感に係る否定的な回答が高い。 「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできている。」26．9（＋8．8） 「学級活動における学級での話合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいる。」26．9（＋7．8） 「自分には、よいところがあると思う。」12．0（ー1．0） 「人が困っているときは、進んで助けている。」13．4（＋7．1） 【3　学習・生活面での規律の徹底について】 ○93％のこどもたちが積極的に係と当番活動に参画することができた。 ○「聞くこと」については、学校アンケートでは、肯定的な回答は、児童が91％、保護者が86％と高い結果であった。研修部や人権教育部の取組により人権意識の高さが感じられる結果であった。 ○「筆箱の中身をそろえること」については、86％とのこどもちができていると回答し、目標を上回った。 ▲14％のこどもたちができないことが課題である。	・まずはこどもと対話し、あいさつから全員が言えるようにしていくことが大切だと思う。 ・非認知能力については平素からの積み重ねと思うので、教職員が一丸となって取り組んでほしい。 ・地域人材等を活用した出前授業や体験学習はどれほど行われたのか。 ・地域の偉人等を児童に紹介しているか。 ・人の話を聞く等1.2年生のカワッキーでは全くできていない。教職員の地道な指導に期待したい。 ・全国学調児童質問紙で、否定的回答をしている割合が高いのが気になる。社会性を身に付ける育成をお願いしたい。 ・短期的に身につくものではないと思いますが、授業参観の際にテーマとして取り上げていただき、保護者も非認知能力について考える機会があれば良いと思いました。 ・1年生が行っているようなあのね帳のようなものを高学年でも取り組む。ノートだと先生の負担も増え、先生1対と1のやり取りになるため、月一ペースで友人（クラス）と話す形で行う。 ・グループディスカッションや隣同士で自分が得意なこと、頑張っていること、人に喜んでもらえたことなどをテーマに話をする。聞いた側はどう感じたかを感想を伝える。	・あいさつは、非認知能力を育成するうえでも大切である。キャンペーン的な取組を実施するとともに、児童会や教員が特に学年初めに積極的にあいさつができるように取り組んでいきたい。 ・鈴鹿市が特に力を入れている4つの能力「やりぬく力」「自制心」「自己肯定感」「社会性」を中心に伸ばしていくために、具体的にできることについて、目に見えて分かるような取組を実施していき、保護者へ地域にその具体的な取組を発信していく。 ・令和7年度より全学年で生活綴り方の取組を行っている。今年度はその定着に向けて、人権教育部が中心となって取り組んでいく。 ・友だち同士、頑張ったことや得意なことなど交流する機会は大切だと考えている。テーマを決めて短い時間でも交流する時間を取り入れていきたい。そのためにも、まずは人の話をしっかりと聞くことの大切さについて、学年初めから徹底していきたい。 ・学校生活の大半を過ごす日頃の授業で、こどもたちが思いを伝え合えるような話し合い活動を積極的に行っていく。
人権・特別支援教育	1　人権教育の推進 ○人権感覚を養う授業実践の推進 ・道徳、人権学習の授業公開を全学年で実施し、学年通信等で発信する。 ・特別支援学級すくすくの話を各学級で実施し、障がいのある児童の理解を深める。 ・多文化共生教育を日常的に推進し、外国につながる児童の理解を深める。 ○教職員の人権感覚を磨き、発達課題等に沿った適切な対応ができる研修の推進 ・教員に生活綴り方の研修を実施し、児童の抱える思いや背景をつかむ。 ・「見つめる子」を中心としたレポート研修を行い、学級集団づくりの実践交流を行う。 2　特別支援教育の推進 ・特別支援学級の研究授業を行う。 ・すずっこファイルの内容を関係職員全員が把握し、必要に応じてケース会議や支援会議を適宜実施し、支援方法を共有する。	・人権に関する研究授業：教員100％ ・保護者アンケート「お子さんは楽しく学校へ通っていますか。」児童アンケート「学校は楽しいですか」90％以上 ・保護者アンケート「お子さんは友だちの気持ちを考えて行動していますか」児童アンケート「困っている友だちを助けたり声をかけたりしていますか」85％以上 ・見つめる子の人権レポート作成：100％ ・特別支援委員推進委員会の実施：毎月実施	○授業参観では人権に関する授業を全学年で実施し、保護者にも参観してもらうことができた。11月の神戸中学校区公開授業に向けても、指導案検討から事後検討会まで全教員で取り組むことができた。 ○「お子さんは楽しく学校に通っていますか」の質問に対して、93％の保護者がが肯定的な回答をしていたため、目標が達成できたといえる。 ▲「学校は楽しいですか」の質問に対しては、肯定的回答85％、否定的回答が15％あった。保護者は楽しく行っていると思っている一方、児童はそうでないことが分かってきた。 児童が抱えている悩みや問題があるのかもしれないと探っていく必要があり、今後も生活綴り方などを通して、児童の思いを掴んでいきたい。 ○「お子さんは、友だちの気持ちを考えて行動していますか」の質問に対して、92％、「困っている友だちを助けたり声をかけたりしていますか」に対しては、87％の肯定的回答があり、目標は達成できたといえる。今後も児童のよい行動見られたときには、すかさず認め、褒めていきたい。 ○見つめる子のレポートを全教員が作成し、年2回の研修会を行った。全教員が児童を見つめ、児童の様子や実践を交流することができた。 ○特別支援推進委員会を毎月実施した。支援の必要な児童についての様子を交流し、その支援の方法について担任任せにせず、学校として考えることができた。	・人権教育について全教職員で取り組めたことは高く評価したい。さらなる取組を期待したい。 ・他人をもいやる心の醸成はこどもの成長過程で重要である。人権教育の推進を引き続きお願いしたい。 ・授業参観で人権に関する授業をしていただいた点は、保護者も人権教育について考える機会が得られるので、良い機会だと思いました。 ・「学校が楽しいですか」の質問に対する児童の否定的回答が15％であった点について、児童が学校を楽しいと感じる基準には個人差があると思うので、家庭と学校が連携してこどもの思いをくみ取っていければ良いと思います。 ・児童アンケート内に「なぜ学校は楽しくないかと感じるか」を記入できる欄を設ける。友人関係、学習すること、先生に対してなど様々あると思うし、大きな問題の場合もあれば、些細なことで楽しくないと感じる子も現代では多いと思う。	・神戸中学校区では、11月初旬に行われる「ぬくたいフェスタ」に向けて・人権について考える取組みを実施している。毎年差別事象が市内・県内で起こっているが、その多くは、障がい者、外国人、インターネットに関するものである。特別支援学級の児童や外国籍の児童をつなぐ活動も継続していき、一人ひとりの特性や生活習慣など、友だちのことを知る機会をつくっていきたい。 ・人権の授業実践や授業公開は継続していき、その内容を通信などで伝え、保護者にも啓発していく。 ・年間指導計画や人権カリキュラムの確認や見直しを行い、こどもたちの実態に合わせた人権教育を行っていきたい。 ・児童アンケートや学校アンケートの数値だけでなく、その要因について分かるような手立てを考えていきたい。
生活指導	1　落ち着きがあり、過ごしやすい生活態度 ○元気なあいさつ　きれいな学校　安心・安全　河曲小 ・自分から進んで気持ちのよいあいさつをする。 ・トイレのスリッパをそろえる。 ○校内の整頓、学習規律の確立 ・担任、担任外を問わず、各担当清掃場所を見回り、清掃の徹底を図る。 ・授業始まりのチャイムで授業を始める。移動教室は5分前に移動する。 2　問題行動の未然防止と情報共有による組織的な指導体制 ・いじめアンケート実施（年3回）といじめ防止対策委員会による共有 ・問題行動事案に対しては、学年を中心に複数で対応にあたる。 3　情報モラル教育の推進 ・すべての学級で情報モラル教育を実施する。 ・研修部と連携してクロームブックの使い方についてのルールの徹底を図る。	・児童アンケート「チャイムを守って行動できていますか。」85％以上 ・情報モラルの授業：全学級 ・情報モラルの出前授業：4年生以上で実施 ・児童アンケート「クロームブックやスマートフォンなどのインターネットやゲームについて、お家の人と約束したことを守っていますか。」80％以上	・「あいさつ」保護者85％児童79％ ○集会や各クラスであいさつについて啓発してもらったり、11月のキャンペーンしたりした △キャンペーン中は気持ちの良いあいさつが増えたが、終わるともとに戻ってしまった。 ・「学校のきまり」保護者88％児童86％ △学校全体でトイレのスリッパが揃わない現状があり、たびたび職員打合せで話題にして、職員がまず揃える姿を見せるところから始めているが、なかなか定着できていない。 ・「チャイム席」保護者79％児童91％ △5分前に次の授業の移動をするように指導しているが、特に運動場から戻る児童で、なかなか切り替えられない児童もいる。 ・問題行動 ○起こった問題行動に対して素早く情報共有し初期対応にあたることができ、学年の先生を中心に複数対応で聞き取りを行うことができた。 △複数対応しているため、聞き取りが休み時間に終わらずに、授業中に入り、ほかの児童の学習保障が45分確保できないこともあった。 ・「情報モラル」 ○4年生でソフトバンクに出前授業を依頼し、計画に合わせて実施した。また、各学年に情報モラル授業の計画表を作成し、実施してもらうことで系統立てて指導をしている。 △クロムの使い方が守れなかったり、対象年生に達していないアプリの使用が見られたりした。 「インターネット、ゲームの約束」保護者76％児童84％ ○1学期生徒指導部から2学期に研修部からクロムブックのきまりを再確認し、2学期にはクロムの使い方の職員研修を実施した。	・まずは朝のあいさつ100％を目指す。 ・あいさつキャンペーンを定期的に取り組むとよい。 ・あいさつは社会生活での基本。以前にある先生が考えた「あいさつチャンピオン」は有効だった。 ・1日に何人の人に自分からあいさつできたのか。また、いい行いができたのか、各学級で目標化してはどうか。 ・できた児童をみんなの前で公表し、ほめてあげることもいいと思う。 ・あいさつは日常生活での基本である。地域が一体となって元気なあいさつ、自分から進んであいさつする環境づくりを行う必要がある。あいさつ運動の取組強化を推進しなければならない。 ・ある問題行動に複数の先生方でご対応いただくと、他の児童の授業に影響がある場面があり、「今日は○○の授業ができなかった」といったこどもの声を聞くと、あるはずだった授業を受けられなかったこども不満が残りますし、それによる影響も心配になります。複数の先生方でご対応いただく良い点はもちろんあると思いますが、そのことによって影響を受ける児童がいる部分を合わせて考えていただきたいと思います。 ・あいさつ啓発のキャンペーンや、スリッパを揃える取組など、学校で行っていただいている取組を保護者にも伝えていただけると、家庭でもそれをきっかけに声掛けができると思いました。	・あいさつは、生活習慣の基本であるので、非認知能力を育成するうえでも大切であり、学校の取組を学級でしっかりとできるように、年度当初からしっかりと指導していきたい。 ・目標を数値で評価するのは児童にもわかりやすいので、学級の取組にしていけるよう具体的な事例を教職員間で共有して取り組んでいきたい。 ・生活指導事案については、緊急を要する場合は除き、授業に支障が出ないようにしている。こどもが安心できる学校となるよう、年度当初からの学級経営を学校全体でしっかりとしてけるように「チーム河曲」で取り組んでいく。 ・あいさつやはきものをそろえる、廊下の右側歩行の取組など、引き続き、校内のきまりを守る指導が徹底されるよう、全職員で指導していく。 ・家庭と連携して取り組んでいきたいものについては、学校ウェブページだけでなく、学年通信等でも発信していきたい。 ・クロームブックの使い方については、全学年で学校の学習で使うものであり、鈴鹿市から貸してもらっていることを意識させるために、4月に全学年で指導の徹底を図る。
教職員の働き方改革	○働きやすい労働環境づくり ・校舎内の環境整備（修繕等）を積極的に行い、児童が快適に過ごせる環境を意識する。 ・さわやかなあいさつと清掃が行き届いた学校環境づくりを図る。 ・会議の日程調整および職員打合せ活用による会議時間の短縮に努める。議案を三部会➡学年部会➡企画委員会で周知徹底を図る。 ○総勤務時間の縮減 ・行事や会議の精選、効率的な業務の推奨、SSSの活用にいる平準化を図る。 ・定時退校日の徹底（月各2回） ○服務規律の徹底 ・「報告・連絡・相談」がその日のうちにできるシステムを構築する。 ・チーム「かわの」で気軽に声掛けできるような風通しの良い職場づくりを進める。 ・やりがい、満足感をもって仕事できる声掛けができるを教職員集団づくりに努める。 ・服務規律に関する管理職による継続的な声掛けや指導教諭を中心としたミニ研修会を実施する。	・一人当たりの月平均時間外労働：30時間以下 ・放課後開催の会議を60分以内にする：70％以上 ・定時退校日を月2回設定	○校舎内の環境整備（修繕等）を地域の人的資源を効果的に活用して実施し、こどもたちが快適に過ごせる環境を構築することができた ○生徒指導部を中心に「あいさつの虹をかけよう」の取組により、さわやかなあいさつの推進できた。 ○教頭を核として会議の日程調整および職員打合せ活用による会議時間の短縮に努めることができた。 　また、議案を三部会➡学年部会➡企画委員会で周知徹底および職員会議の時間短縮を図ることができた。 ▲時間短縮は昨年度比で短縮されたが、目標値を達成することができなかった。 ○定時退校日を月2回設定し、職員間の声かけで意識を図ることができた。	・最近はよくなってきているので、水曜日と金曜日は完全定刻で残業0を守るなどの取組をしていくとよい。 ・チーム河曲として一丸となって働きやすい職場づくりに努めていただきたい。 ・教職員の背中を児童は見ている。一人一人が意識をもってよい河曲小学校を創っていってほしい。	・定時退校ができるような取組になるように行事や会議を入れないなどの配慮を設けて残業0ができるようにしていく。 ・働きやすい職場となるように、一部の職員に仕事の負担がないように「チーム河曲」として働きやすい職場づくりに取り組んでいく。 ・計画的に学校運営ができるよう、見通しをもって取り組むことが教職員のゆとりにつながると考えている。 ・スクールサポートスタッフの利用や教材の共有化を行い、教材研究等にかける時間確保を工夫する。・授業中のこどもへの支援は、支援員、介助員、サポートに入る教員と連携し、情報共有を大切にする。